資本主義社会の再生産と人権観念〔上〕

中　尾　訓　生

一　社会再生産の概略

I

社会は二つの基本的要素から説明することができるだろう。それらは(A)，物質的財貨の生産であり，(B)その社会を特徴づける関係である。社会が存続，維持されているということは(A)と(B)が再生産しているからである。

物質的財貨の再生産が確保されるためには，四条件が充足されなければならないという置塩氏の説明に，私は依拠している。[1] これらの四条件は(B)との関連で機能している。

1）生産財と消費財をそれぞれ1種類と想定し，生産財を1単位生産するのには，生産財を a_1 単位，労働を τ_1 単位必要とし，消費財を1単位生産するのに生産財を a_2 単位，労働を τ_2 単位必要としよう。そして生産財，消費財をそれぞれ X_1，X_2 だけ生産したとする。

次の四つの条件が得られる。

$1-a_1>0$ ……①　　$1-lt_2>0$ ……②

t_2 は消費財を1単位生産するに投入された直接・関接の労働量，

l は労働力の再生産のために必要な消費財を総労働支出で除した単位時間当りの必要消費財量。

$$\frac{1-\ell\tau_2}{\ell\tau_1}\geqq\frac{x_1}{x_2}\geqq\frac{a_2}{1-a_1}\cdots\cdots③$$

生産された生産財，消費財は消耗生産財の補塡，労働力の再生産のために充当されること。……④

私は(A)と(B)の関連についての置塩氏の説明には満足していない。[2)]

これら四つの条件の充足の様態は(B)の検討を経て明確にすることができる。

諸個人は相互の行為，所作，表現，特に言語によるそれを通して共通の地盤に存ることを感得するのである。

彼らは交通しており，交通可能であることを感得している。この場合，彼らは社会を形成している，ということができるだろう。

私は諸個人を社会人たらしめているものを(B)基本関係と呼ぶことにする。

基本関係は行為，所作，表現のなかに貫徹しており，それらと別のところに存在しているのではないから基本関係は彼らの実践のうちに確認されるし，確認しなければならない。

彼らは基本関係によって統合，規制されているが，彼らは基本関係を形成してもいるのである。

彼らは日常の実践においては基本関係を意識しない。その必要を感じない。彼らにとって基本関係は所与である。

---

①，②，③，④は，どのような社会であれ，存続のためには充たさねばならぬものであり，それぞれの社会に固有な独特の仕方でもって，これを行う。(置塩信雄：『蓄積論』2章1節)

四つの条件が経済的に有意味であるためにはこれらは共通単位で表示されねばならない。置塩氏は労働時間を共通単位としている。資本制以外の社会，例えば，未開社会における四つの条件を充足させる様式を解明するため，労働時間は単位として適当であろうか。それぞれの社会は独特の様式で四条件を充足させているということは，それぞれに尺度（単位）をもっているのであって，氏のように労働時間を尺度としてあらゆる社会形態に四条件を適用しても独特の様式の解明はなされないであろう。

その社会の適切な尺度が得られるということ，それ自体が独特の様式をすでに示しているのである。

私が氏の四条件を採用しているのは，それが(B)基本関係，を鮮明にさせるからである。資本制社会では物的生産（経済）のタームそれ自体が，(B)を表現しているため氏の四条件を借用している。

しかし，社会に対するidentityの感得，確認は基本関係への接近によってである。

基本関係それ自体は把握されることは困難であって，彼らが接近するのは，基本関係の表現体として具体的な，なんらかのモノである。本稿の対象であるブルジョア社会では実践を根拠づけ，正当化する解釈は基本関係と関係しており，これは人権宣言として結実し、資本主義諸国の憲法にみることができる。

かかる意味からすると，基本関係の把握は無意識的次元からだけでなく，意識的次元からの考察も必要としているのである。

彼らを「統合」し，彼らによって「形成」されている基本関係の措定は、「何事も初めがむずかしい」という諺のごとく，社会科学の初めの困難である。

この困難の克服は、近代自然法思想家達，デュルケム，マルクスと三様であるが，私はマルクスの方法に依拠している。

私が社会の構造と呼んでいるのは，(A)，(B)両要素の関連である。

しかし，注意しなければならないのは，(A)，(B)の関連を考察するというとき，すでに困難に直面していることである。

2）置塩氏は「生産における基礎的な人と人との関係は生産手段の所有形態である」とされている。氏は所有について次のように説明する。「ある人間Aが生産手段Xを所有しているということは，何を意味するかをつっこんで考えておく必要がある。それはAがXをどのようにでも処分，使用できるということを意味する。……A がXを所有しているという関係は，一見，人間Aと生産手段Xとの人と物との関係のように見えるが，実は生産手段Xをめぐる人間Aと人間B，C，D，……の間の関係である。この生産関係は，だれが労働を担当するか。誰が生産に関する決定を行うか。誰が生産物を所有するかという諸関係を規定する。」〔注1，91頁〕所有とは人と人との関係である，といっているが，まさにそのとおりである。

しかし，氏はこれ以上は説明していない。「人と人との関係」がAがXを所有していることを社会的に承認しているのである。

したがって「人と人との関係」(本稿では，(B)関係,）が分析されねばならない。

氏は「所有」に言及しているが，(B)についての分析は欠落している。したがって，物的財貨再生産の条件と(B)が不可分一体であることから生じる問題には全く言及しない。

それは(A)，(B)を当の社会からいかに抽出したのか，という問題である。

この問題は上述したところの(B)の性質から生じている。すなわち，基本関係を考察する主体が，基本関係の形成者でもあるという認識論上の困難に直面しているのである。

マルクス体系の理解は，まさにこの困難性の理解に懸かっている。この困難性を理解することができないマルクス解釈者はマルクス体系を結果としてイデオロギーの体系としてしまっている。

マルクスは人格的依存と物的依存という二つの基本関係を提示した。[3)]

(A)と(B)の関連は人格的依存の場合と物的依存の場合とでは相異しているのである。

人格的依存の関係は物質的財貨の再生産を規制し，包摂している。包摂しているというのは物質的財貨の再生産領域はそれ自体の表現タームをもたないで，人格的依存関係のタームで表現されているということである。

3）物象的依存関係はたがいに無関心な，したがって自由な諸個人の相互的かつ全面的な依存性である。この全面的相互依存性は貨幣に現象している。彼ら固有の活動または生産物はその特質，具体性は否定され，消失して量化され，量的差違としてのみ顕現する。

これは彼らの活動，生産物が貨幣（＝価値）に還元されているということである。

物的依存関係とは貨幣を媒介とした人と人との関係である。貨幣を手にすることは，したがって，この関係の下では社会的力を手にすることである。

経済学者はこの関係を一般的に次のように表現している。「各人はその私的利益のみを追求する。そしてそれによって自分ではそれを欲するのでもなく，知ることのないままに，すべての人々の私的利益，一般的利益に奉仕している。」マルクスがシェークスピアの『アゼンスのタイモン』を高く評価したのは人々は通常は経済学者のようにこの関係を解釈するのにたいして，この関係の物的依存性をはっきりと把握しているからである。資本制生産に先行する諸形態を特徴づけているのは，人格的依存の関係である。

血縁的，家族的，地縁的，宗教的，等々のような関係である。

この関係の下では，個人は自立しておらず，一つの全体に属するものとしてあらわれている。諸個人は相互に他者と人格的に関係し合い，また共同体の内部における彼らの身分，役務および働きに応じて関係し合う。

『経済学批判要綱』Ⅰ　79頁　マルクス，(高木　訳)

K・ポランニーを借用すると，経済（物質的財貨の再生産）は社会に埋め込まれているということになる。経済（置塩氏の①②③④の四条件）は互酬(reciprocity)あるいは再分配という形態を主要形態として充足されている。[4)]

これらの形態は血縁的，家系的か宗教的あるいは軍事的関係を内容とした人格的依存の関係に浸され，機能している。

したがって経済それ自体を把握することはできない。人格的依存の関係を通して経済は解明されるのである。

私達の経済観念で互酬，再分配という形態をとった経済を解釈することは誤りであろう。ポランニー，そして彼が依拠しているマリノフスキーはこの誤りに陥っている。

私達の社会（経済）観念は近代自然法思想家によって構成されたものであることからわかるように，それは市民社会（商品交換）の形成，確立を背景として生じたのである。それは商品交換の実践を表現したものである。市場から抽出された自然人（合理的経済人）の心性，行動を体系化したものである。（この点については，節を改めて説明をする。）

この観念の抽出方法はマリノフスキーの未開社会の認識方法と類似している。

「人間の社会的諸関係の究極的要因を，生物的個体としての人間の生理学的，心理学的な契機に還元させるマリノフスキーの認識方法は，それが特定の民族（種族）のおかれている歴史的，社会的諸条件をすべて捨象し，純粋に生物学的な人間を設定するという立場にたつものであるが故に，必然的に超歴史的なものたらざるを得ないのである。

かくて彼の文化観は，原始民族と文明民族との間の文化的，歴史的な連続性という論理をすら展開せしめるのである。」[5)]

4）『人間の経済』Ⅰ（玉野井・栗本：訳）　88頁，『THE Livelihood of Man』 by Karl Polanyi:

5）「未開社会における犯罪と慣習についての解説」：江守五夫：261頁（『未開社会における犯罪と慣習』マリノウスキー：青山道夫，訳）

マリノフスキーはトロブリアンド島において母系を主とする親族関係の維持に財の獲得・分配が対応しており，島民の経済行為は呪術的，宗教的行為として遂行されていることを観察しているが，彼はこれらの行為を早急に私達の行為との共通性に（差異を問題とすべきなのに），還元してしまう。

彼は私達とトロブリアンド島民との差異ではなく，一般的，普遍的な行為を探索している。そして，残念なことにその豊富な観察資料を得ているにもかかわらず，結局は極めて自明の結果に至ることになる。[6] レヴィ・ストロースは次のように批判している。マリノフスキー派の方法は「研究の対象となっている人々をわれわれ自身の社会の反映，われわれのカテゴリー，われわれの問題の反映と化してしまう」[7] のである。この批判をポランニーにも向けることができるのである。彼の「貨幣」についての説明をみてみよう。

資本主義社会の貨幣は，①計算手段，②交換手段，③支払い手段，④蓄蔵手段，の相互に関連した四機能を有している。これら四機能を兼備している貨幣は全体的な商品交換（流通），*W*（商品）—G（貨幣）—*W*（商品）の円滑な運行を前提として導出されているのであるが，ポランニーは「原始貨幣」をこの貨幣概念を適用して規定するのである。

6）「マルセル・モース論文への序文」クロード・レヴィ＝ストロース（『社会学と人類学』I: M・モース　有地・山口・伊藤・訳）

7）『構造人類学』　20頁，クロード・レヴィ＝ストロース　（『Anthropologie Structurale』 par Claude Lévi-Strauss）荒川・生松・川田，他，訳

「農耕制度」は「環境が土壌の開拓に適し，社会的水準がその存在を許すほどに十分高いところでは普遍的に見られる。」ものだといったことを聞かされても，この「農耕制度」について何を学んだことになるのだろうか？　また張り出し材のついたカヌー，その多様な形態，その分布の特殊性などについて，「このカヌーの装置はオセアニア文化の物質的，技術的な制限にうまく合致した最大の安定性と航行性と操作性を与える」ものだと定義されたところで，何をいったことになるのであろうか？

その唯一のではないにせよ，第一の目標が相違点を分析し解釈することにある学問が，類似点しか見ようとしないことによってすべての問題を見失ってしまうことはたしかである。しかも同時にそれは，求めている一般的なものを，それが満足する平凡なものから区別するためのあらゆる手段を失ってしまうことになるのである。」　17頁，18頁，

すなわち，四機能を果しているものを全目的貨幣と呼び，四機能を個々に分解し，それぞれを特定目的貨幣，つまり原始貨幣というのであるしたがって，一つのものが全機能を果しているのではなく，それぞれの機能に応じてその機能を果すに適切な属性を有しているものがそれぞれ貨幣と呼ばれている。

全目的貨幣と原始貨幣の相異は前者が経済という一つの場，つまり商品交換から導出されているのにたいし，後者はそれぞれの機能の作用している場が，例えば経済，宗教，政治等々のような各領域の混在（未分化）であるということに示されている。後者はポランニーが述べているように「経済は社会に埋め込まれている」ことからの当然の帰結なのであるが。

この場合，「貨幣」という語を与える意味がどこにあるのかという疑問を喚起させるのである。

原始社会においては，純粋に経済的な場は存存しないのであるから，私達がイメージするような「貨幣」という語を使用することは問題であろう。

「原始貨幣や古代貨幣が近代的貨幣と異なるのはシンボル体系が統一化される度合においてなのである。」[8] とポランニーはいうのであるが，近代貨幣と原始貨幣との相異はシンボル体系の連続的発展上における量的差違ではなくて質的相異によるのである。

ポランニーの方法がシンボル体系（意味論的システム体系）そのものを考察の対象としていないために，彼は日常のカテゴリーを無批判的に受容し，これを原始社会に適用するのである。当然のことながら彼はシンボル体系の質的相異を捨象する。

これが経済を埋め込んでいる社会（人格的依存の社会）と経済が自立化している社会（物的依存の社会）との質的相違もまた捨象させる。

人格的依存の社会にあっては(A)は(B)によって規制（B→A）されている。つまり(B)のタームで(A)は解釈されるということである。このことはマリノフスキーやポランニーの通俗的結論に至る道に陥らないようにするた

8）（注，4）191頁

め念頭に置かねばならない。

(A)，物質的財貨の再生産なしでは(B)は存在しない。すなわち人間は(A)を欠いては存続することはできないのだから，したがって人と人との関係である(B)は(A)によって支えられているということを(B)→(A)は否定しているのではない。私の意図していることは物的依存の社会における(A)と(B)の関連をみればより明確になるだろう。

資本主義社会は物的依存を基本関係として，その再生産は物質財貨の再生産と不可分一体（A⇄B）である。

ここでは(A)の再生産によって(B)は維持され，(B)の維持は(A)の再生産となっている。(B)→(A)では(B)の維持・再生は(A)の再生産と直接に連結しているわけではない。人格的依存というのは(A)の解明は(B)の解明に結びつかないが，(B)の解明は(A)の解明に至る。

(A)と(B)の不可分一体は商品交換によっている。商品交換の解明は(A)の解明であり(B)の解明にもなっている。「諸商品の交換は，社会的な素材転換，つまり私的個人の特定の生産物の交換が同時に個々人がこの素材転換のなかでとりむすぶ一定の社会的生産諸関係の創出でもあるような過程である。」[9)]

(B)→(A)の下では，人々は(B)のタームで(A)を解釈しているのであるが，(A)⇄(B)の下では，人々は(A)のタームで(B)を語り，(B)のタームで(A)を語っている。

このようなことを可能にさせているのは，(A)，(B)の両タームに意味を付与している基盤が同一だからである。

『共産党宣言』は（B→A）から（B⇄A）への転換を鮮明に叙述している。

ブルジョアジーの日常的生活実践が「それまで名誉と尊敬とを受けていたすべての職業からその後光を剝ぎとってしまった。」「宗教的熱情や騎士的な

9）『経済学批判』57頁，マルクス，(岩波文庫，大内・遠藤・訳)

感激や，町人的な人情などという神聖な感情を」利己的な打算に還元してしまった。他方では，この実践は工場制手工業を不十分として，近代的大工業をもたらした。ブルジョアジーの実践は「生産用具を，したがって生産諸関係を，したがって全社会関係をたえず革命することなしには生存しえない。」[10)]

さて，(A)と(B)に同時に関与しているところの，(あるいは次のようにいうこともできるだろう) (A)と(B)を内包しているところのブルジョアジーの実践についての説明は，これからの本稿の課題となるが，まず(A)と(B)の関連について一層，明確にしておこう。

マルクスは重農主義の体系について以下のように評注している。

「重農主義は事実上，資本主義的生産を分析し，そしてその内部で資本が生産され，また資本が生産される諸条件を生産の永久的自然法則として叙述する最初の体系である。

他方では，それはむしろ封建制度の土地所有支配のブルジョア的再生産として現われる。」[11)] すなわち，(A)物質的財貨の生産，(置塩氏の四つの条件) は物的依存の関係の下で充足されているのであるが，(重農主義者はこれを初めて体系化したにもかかわらず) 重農主義者は(A)を人格的依存の関係でコントロールしようとしたのである。

重農主義者の「レセ・フェール，レセ・パッセ laissez fair, laissez passer」のスローガンは商品交換関係 (物的依存の関係) の拡大を意図してのものであるが，これが人格的依存の関係 (封建的関係) を崩壊させるということを彼らは気がついていない。

ケネーの経済表を上述の視角から解釈することができる。

『経済表』では地主が財の流れの起点に位置し，再生産の規模と構造とを左右するものとして積極的な社会的役割を担っている。

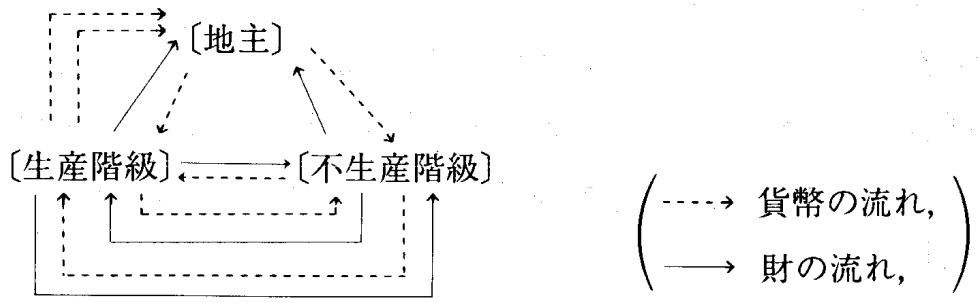
---

10)『共産党宣言』　38頁　マルクス：エンゲルス　(角川文庫・塩田・訳)
11)『剰余価値学説史』Ⅰ　19頁　マルクス　(マル・エン全集・26Ⅰ)

しかし，財が循環してしまうと貨幣は生産階級のところにとどまり，出発点の地主のところには還流してこない。新たに循環がはじまるためには，つまり生産の継続のためには，生産階級の手にある貨幣が地主階級の手に移転しなければならない。それはいかにしてなされるか。

『経済表』に示されている他の線は貨幣を媒介とした財の交換を示しているが，この線，すなわち生産階級から地主階級への貨幣の移転には財の流れは対応しておらず，一方的贈与を表現している。

図—1



商品交換関係ではないところの一方的贈与の関係が(A)，物質的財貨の生産を規制している。『経済表』は根底においては「レセ・フェール，レセ・パッセ」ではないのである。

(B)　人格的依存の関係（贈与関係）
↓
(A)　物質的財貨の生産
↓　↑
(B)　物質的依存の関係（商品交換関係）

重農主義者が意図していたこと。

現実の進行

以上のように封建的要素とブルジョア的要素の混在が『経済表』には存在している。

「ケネーは過去の方へ向いたままであり，彼の体系のなかには明らかに封建的な側面がある。その基盤の上に古い社会秩序を強化しようとしている。」[12)]

しかしケネーは現実の経済の拡大の性格，新しき要素をはっきりと把握してはいたのである。

さて，ここで(A)と(B)の関連という視角からマルクスの再生産表式を対置するとさらに焦点が明確になるだろう。

「再生産表式」は(A)が，厳密にいうならば①，②，③，④の四条件が，資本主義社会（B，物的依存関係）の下でいかに充足するかを示すのである。①，②は資本主義社会である以上，価格＞費用であることから充足されていると前提される。

④が(B)の下で充足されるということは各部門の生産物が販売，購買を通して次期の生産の継続に充当されるということである。

そして，各部門相互の販売，購買は③を逸脱してはならないということであった。

換言すると self-interest を行動原理としている人々の社会では結果として③④は充足される。人々は意識せざる結果として③④に従っているのである。

マルクスは年々の社会的総生産物を生産財と消費財とに分類して社会的に③，④が存立することをまず示している。

(イ)，次期の生産継続に充当するように生産物が存在すること。

(ロ)，(イ)が満たされているとして，それらがそれぞれの消費用途先に到達すること。

(イ)は　$W_1 = C_1 + V_1 + M_1 = C_1 + C_2$

$W_2 = C_2 + V_2 + M_2 = V_1 + M_1 + V_2 + M_2$

したがって $V_1 + M_1 = C_2$ が満たされることである。$V_1 + M_1 = C_2$ はまた③も充足させている。[13)]

(ロ)は貨幣の出発点への還流として説明されている。〔図—2〕貨幣が出発

---

12)『フランス経済理論の発展』J．モリニエ87頁（坂本・訳）
『Les métamorphose d'une théorie économique, Le revenu national chez Boiguilbert, Quesnay et J-B, Say』 par Jean Molinier.

13)（注・1）　129頁

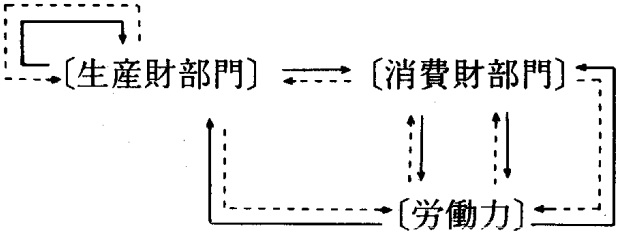
点へ還流することによって生産物の循環は継続可能となっている。

ケネーの「経済表」と相異している点である。

すなわち(A)物質財貨の再生産は商品交換（B，物的依存の関係）として進行しているのであるから，(B)商品交換関係の再生産は(A)とともにある。資本主義社会では (A) ⇄ (B) である。

(A) ⇄ (B)を(B)に重点を置いてこれから展開するであろう。

図－2



〔⟶財の流れ；- - - -→貨幣の流れ〕

Ⅱ

マルクスはシェークスピアの『アゼンスのタイモン』に，M. ヴェーバーは『フランクリンの自伝』「諸評論」のうちに資本主義社会のエートスを読み取った。

マルクスの読み取ったエートスは金（＝貨幣）に中心化した人間関係，つまり自然，人間性を無差別一様に量に還元して本来的にそれ自体が有している属性を無視してしまう。

全能者としての金（＝貨幣）に従い，金（＝貨幣）の多寡によって全てのものを評価し，秩序づけるところの生活態度が『アゼンスのタイモン』において読み取った資本主義社会のエートスである。

「盗人を栄誉の地位につかせ位階とひざまずきを与え元老院での権勢を与える。

こいつはまた年取りすぎた寡婦に求婚者をつれてくるし，傷が毒に膿んで

胸くそ悪いと病院から出された女どもをこいつは香芳しい五月の青春に若がえらせる。

いまいましい金属め，おまえは人間の共通の娼婦だ。諸国民を攪乱させるやつだ。」「できぬ事どうしを親密に結びあわせ，無理やり接吻させる。おまえはあらゆる言葉で話し，あらゆる目的にものを言う。……」[14)]

相互に無関心な人々，かかる意味で自由な諸個人を結びつけるものが黄金（＝貨幣）であって，人々が貨幣を手にすることは社会的力を手にすることであるという資本主義社会の基本関係であるところの物的依存関係をシェークスピアは把握している，[15)] とマルクスはいう。

マルクスの課題は商品交換，流通の場で機能している貨幣，それは(1)計算手段として，(2)媒介手段，(3)支払い手段，(4)蓄蔵手段，としてであるが，この貨幣に『タイモン』から読み取ったエートスが体化していることを理論化することであった。

『資本論』の「１章，商品」で精細に展開されているように，この課題は果されている。

(1)，(2)，(3)，(4)の諸機能の背後にあって，それら規定している「価値尺度」がその論理化の要点である。逆説的にいうならば，マルクス以外の貨幣論は(1)，(2)，(3)，(4)の諸機能を「価値尺度」から説明したりはしない。彼らにとってマルクスの「価値尺度」はただ説明を混乱させるだけのものなので

---

14)『経済学・哲学手稿』196頁　マルクス　（国民文庫，藤野訳）

15)「シェークスピアは，貨幣についてとりわけ二つの属性を取り出している。

(1)　それは目に見える神であり，すべての人間的および自然的な属性をその反対のものにかえてしまうこと，事物の全般的な混同と転倒である。それは，できぬ事どうしを結合させる。

(2)　それは人間たちや諸国民の共通普遍な娼婦，共通普遍な取り持ち屋である。貨幣によるすべての人間的および自然的な性質の転倒と混同，できぬ事どうしの結合，　貨幣の神的な力，は人間たちの疎外されたる，外化しつつある，おのれを譲渡しつつある類的本質としての，貨幣の本質のなかに存在している。」　（注14）201頁

ある。「価値尺度」が担っている論理化の要点は社会科学における初めの困難に関することであるということが想起されるであろう。

ヴェーバーは「資本主義の精神をほとんど古典的といいうるまでに純粋に包含している」としてB・フランクリンの諸論述を取りあげる。「時は貨幣であることを忘れてはいけない。・・・・・・・・・・

信用は貨幣であることを忘れてはいけない。・・・・・・・・

貨幣は生来繁殖力と結実力とをもつものであることを忘れてはいけない。・・・・

支払のよい者は万人の財布の主人であることを忘れてはいけない。約束の時期に正確に支払うことが評判になっている者は，友人がさしあたって必要としていない貨幣をすべて何時でも借りることができる。・・・・・・・・・

信用に影響を及ぼすなら，どんな些細な行いにも注意しなければいけない。　・・・・・・・・　・・　」

ヴェーバーは上記に引用したフランクリンの文を次のように解釈している。

「この〈吝嗇の哲学〉に接してその顕著な特徴として感ずるものは信用のできる正直な人という理想であり，わけても自分の資本を増加させることを自己目的と考えることが各人の義務であるとの思想である。実際この説教の内容をなすものは単純に処世の技術ではなく，独自な倫理であって，これを犯すものは愚鈍であるに止まらず，一種の義務忘却を犯すものとされているのである。このことは何にもまして事柄の本質をなしている。そこでは事業の才智が教えられているだけではない。

そこには一つのエートスが表明されているのであって，このエートスという性格こそがわれわれの関心をよびおこすのである。」[16)]

ヴェーバーが『フランクリン自伝』に読み取ったエートスは「人間の集団

16)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』　マックス・ヴェーバー（上）39頁（梶山・大塚：訳）

によって抱かれる物の見方」であり，彼らに共通している生活態度であり，彼らを包みこんでいる「倫理的雰囲気」でもある。したがってその集団の特性を示しているということもできる。私が関心を寄せているのはその集団の維持・再生にとってエートスの果している作用である。そしてその作用面における資本主義社会の(B)基本関係との類似性である。

大塚氏が「資本主義の精神　(＝エートス)」は資本家のみならず賃金労働者の生活態度をも包みこんでいるとの解釈は私の抱いた類似性への感を強くするのである。[17)]

勤勉にして質素，そして正直で誠実な生活態度（エートス）こそが近代資

---

17)「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の精神」111頁　大塚久雄　(『マックス・ヴェーバー研究』・所収)

大塚氏はヴェーバーの資本主義の精神を次のように解釈している。

「㈠ヴェーバーのいう資本主義の精神においては営利が倫理的義務という姿をとっているというばあい，それは決して人間生来の感性的欲求としての営利欲が何らそれ自体一つの倫理的徳性とみられているとか，或いは営利がただそれ自体として最高善と考えられているなどといった事態を意味してはいない。むしろ，その禁欲的な倫理的雰囲気のうちにあっては，およそ慾—感性的欲求の満足—の形をとるものは営利という姿においてさえ，まったく存在の余地を見出さないといわねばならぬ。㈡，そうではなくて，ヴェーバーのいう資本主義の精神においては，さきに述べたような禁欲的倫理が営利の実践を媒介しつつ，みずからの価値を実現するのである。逆にいえば，営利活動はそうした禁欲的諸徳目の実践によって媒介されつつ行なわれ，そのかぎりにおいて，営利のための個人の努力は彼の道徳的完成への努力と完全に重なりあい，こうして営利は倫理的色彩をもつ生活の原則という性格を帯びて勝れた意味で自己目的となっているのである。」(141頁)

大塚氏は宗教倫理が営利の実践を「媒介」してその価値を実現する，と解釈されているが，解釈すべきはこれからである。

「媒介」とはどういうことなのか。

宗教的実践と営利実践とは質的に全く相異しているのである。前者は対象にたいして個別的に働きかけるが，後者は対象の個別性具体性を捨象して，量化がその働きかけの中味なのである。全く異なる領域でその価値が実現されるとはどういうことなのか。

宗教タームで営利領域を解釈してしまうということであろうか。これは営利領域が小さく，経済は自給自足を基本としているならば可能であろうが，営利領域が相互に無関心で自由なる諸個人を統合（貨幣による接合）しているような社会では不可能である。

大塚氏は次のようにもいわれている。

本主義を形成し，拡張せしめたブルジョア精神の根底であるとヴェーバーは主張する。自分の資本を浪費しない，増加させること，「巨額の財産は獲得されても利息には据置かれずに，後から後から事業に投資され，ゆとりのある安暢な生活は失せて厳しい生真面さがこれに代った。」[18] 資本の増殖は自己の快楽，欲望を現在はもとより将来において満足させるためではなくて，或る倫理の実践の帰結なのである。

資本の増殖は「貪欲」「拝金主義」の「別言すれば富裕であることを究極目的として富を追求」することの帰結ではない。一方マルクスに依ると資本

「禁欲的倫理の実践が営利活動を媒介しつつ遂行されると同時に，逆に営利活動が禁欲的倫理の実践を媒介しつつ遂行されているのであって，資本主義の精神における倫理と営利の内面的な結びつきがこのような逆の構造的側面をも含んでいる。」(143頁)「営利活動が倫理の実践を媒介しつつ遂行されるという倒錯的な事態のもとでの，営利自体を最高善とする倫理，これこそが資本主義の精神の精髄である。」(149頁)

大塚氏は「媒介」ということを便利に使いすぎているように思う。

(1)宗教倫理の実践が営利活動を媒介して遂行されている。　(2)営利活動が宗教倫理の実践を媒介しつつ遂行されている。

(1)の場合，宗教タームで営利活動を解釈してしまうということで，営利活動は宗教領域から意味を付与されているのである。

(2)は(1)の逆の事態である。

(1)と(2)を全く切断して，(2)の場合に，「資本主義の精神」の存在をいっているのであれば，営利領域（市場）から資本主義の精神は生じているということになり，「資本主義の精神」とプロテスタンティズムの倫理の関係は定義されている「資本主義の精神」の意味を消失してしまう。これは，氏自身が解釈されているゾムバルトのそれに近づけるものである。(167頁)

(1)と(2)を共存させて（むしろ，拮抗が適切であろうが，）「資本主義の精神」を説明しているのであれば，その前に(1)，(2)の共存こそが説明されるべきである。エートスによって包括されている社会で，その社会を特徴づけるものが，(1)と(2)であるというのはどういうことなのだろうか。

氏の解釈を積極的に理解すると，次のようになるであろう。

(1)と(2)は対立するものであるがエートスの体現者がそれらを内化（主体の内に取り込んでいる。）している。(1)と(2)は現実の状況に存在根拠がある。つまり伝統主義の宗教観念と人格的依存に立脚した経済構造から脱却しようとしている人々にとって(1)は伝統主義の宗教観念と対抗するため，(2)はその経済構造から脱却して日常性を土台とした経済実践が必要としている。

18)（注16）77頁

の増殖は合理的「貧欲」合理的「拝金主義」の帰結であり，合理的「貧欲」は「アゼンスのタイモン」で読み取った貨幣観を前提にしているのである。

私がマルクス理論と対置してヴェーバーの「資本主義の精神」を考察するのは，これが日常的商品交換関係の諸規則を体化している人々の実践といかなる関連にあるかをみるためである。

換言するとヴェーバーの「資本主義の精神」は資本主義社会の構造（A→←B）にいかに位置づけることができるであろうかという視点からそれを考察している。

時は貨幣であり，信用は貨幣であるというのはヴェーバーに依ると勤勉，質素，節約をうながす宗教から発する禁欲的精神，倫理の翻訳である。換言すると，プロテスタンティズムの倫理によって躾られた人々がそれを消化して日常生活の宗教的場以外における実践がかかる雰囲気の下でなされるとき，彼らがその宗教倫理を意識していない場合でも，ヴェーバーはその実践はその宗教倫理でもってよりよく解釈されるであろうというのである。

日常的商品交換の実践が宗教倫理に発するエートスによって染上げられているという。

宗教領域と日常的経済領域（—日常の用に供される諸財の商品化による市場に関連する領域—）の関連をヴェーバーは，「職業」観念に求める。

私はこの関連を経済活動が宗教，この場合プロテスタンティズムによって根拠，正当化されていることと解釈したい。

日常的な経済実践が自律化してくるとそれは支配的な「伝統主義」の思想と対抗してくる。したがってそれは根拠づけ，正当化を必要とするのである。

宗教倫理によって根拠づけられている職業観念を体化している人々の経済（職業）活動は確固とした信念に基づいており，それ自体を義務と感得してなされている。

『フランクリンの自伝』及び「諸評論」をこの視角からヴェーバーは読んでいる。

勤勉に質素にそして誠実で正直にあれという自己を厳しく律したフランク

リンの生活（経済）実践はプロテスタンティズムの禁欲的エートスに依るものであると彼は解釈する。

しかし，フランクリン自身の禁欲的生活態度を律しているものはプロテスタンティズムのエートスであるかもしれないがフランクリンが禁欲的生活を読者に勧めている方法は功利的であることを忘れてはいけない。

利潤の追求を卑賤とみなしている伝統的宗教世界におおわれている日常生活から，この殻を破って日常性を土台とした経済実践が自立化（宗教的拘束の打破）してくると，経済実践は自己を表現する新たな観念体系を必要とするのであるが，過渡的にはそれは既存の宗教的枠組に新しい内容を盛ることによって代替とする。

いうまでもなくヴェーバーの検討している「職業」概念はまさにこれを示している。

日常性を土台とした経済実践が一般化すると，（つまり商品交換による(A)の充足）「職業」概念が担っていた課題も消失する。

それは物的依存関係の表現（観念）体系がこの経済実践に照応するまでの代役である。逆にいうならば，「ピュウリタニズムの人生観は近代の経済人の揺籃をまもったのである」[19]

神によろこばれる職業の程度を決するのは，「第一に道徳的標準であり，つぎに，それの生産する財の全体に対する重要性という標準であり」さらに第三として，「私経済的収益性」であるが，[20] 第三の標準が実践的に重視されてくると，第一，第二の標準は消失していくのである。

19）（注16）（下）231頁

「産業的中産者層のうちその富裕な上層は産業企業の主力に転化し，貧乏な下層は賃金労働者の中核を形づくるにいたった。

この産業的中産者層に属する小商品生産者たち」がエートス，資本主義精神の担い手であった。「彼らは封建制の支配に抵抗しつつ，或いはそれをすでに揚棄しおえて，ようやく興隆にむかおうとする小市民層や，借地農民層である。」（注17）154頁　156頁

20）（注17）176頁

このことは経済実践がその正当化，根拠づけに「神」を必要としなくなったということでもある。「神」による人々の包括は有効性を失ったのである。

実際，第一，第二の標準と第三の標準は異質であって，これらは「程度」の順位を示す標準とはなり得ない。

第一，第二の標準を位置づけている体系は対象を具体的にとらえる，解釈するのに対して第三の標準のそれは対象を抽象的に量化してとらえる。対象を具体的にとらえる，解釈する方法はこの場合宗教枠組によって常に規制されている。

換言すると，宗教上の教義の解釈に依って対象の把握，解釈も異ってくる。教義の解釈者の自己中心性から対象の把握は脱却することができない。第一，第二の標準の客観性はその体系に人々が包括されていることが要件である。何が道徳的であり，いかなる財が社会にとって重要であるかについて共通認識が存在しているという場合である。

第三の標準は対象を量化することによってその完成度を高めるのであるから，対象量化の方法はそれ自体として，すなわち体系から離脱するかたちで深化する。かくて客観性を提示してくる。

第三の標準が実践上重視されてくるということは，第一，第二の空洞化であり，したがってまた第三の標準の空洞化を進める。[21] それはヴェーバーの「資本主義精神（＝エートス）」の空洞化でもある。なぜなら，「神によろこばれる職業」の決定の標準たり得なくなっている。

「職業」概念にもみられるのであるが「資本主義の精神」の作用について

21）ヴェーバーは，このことが信仰者にはどのように映じているかをジョン・ウェスリーに語らせている。「私はきづかっているのだが，富の増加したところでは，それに比例して宗教の実質が減少しているように思う。それゆえ，事物の本性にしたがって，まことの宗教の信仰復興を長いあいだ継続させうるような方法は，私には判からない。なぜというに，宗教は必然的に勤労と節約を生むほかなく，この二つは富をもたらすほかはない。

しかし，富が増すとともに，高慢，激情，そしてあらゆる形での現世への愛着も増してくる。……

宗教の形は残るけれども，精神はしだいに消えていく。」（注16）（下）233頁

は二つのことが語られている。一つは，経済（営利）活動の正当化，根拠づけを主張する，つまり「神」によってそれはなされている。

二つめは，収益性の増大を勤勉，節約，周到」の生活態度，つまり禁欲的諸徳目の実践によって説明していくところである。

ヴェーバーは資本主義経済の機構が確固としたものになると——産業資本主義の確立以降——「資本主義の精神（＝エートス）」は空洞化すると述べている。

ヴェーバーが説明していないことは「エートス」が果していた二つの作用——自己の実践の正当化，根拠づけとその実践の効率性の方法——は資本主義経済機構の確立以降でも必要とされるのであるから，空洞化の後にはこれらの作用を果すものはどうなるのか，ということである。

これらは，本稿の視角からすると，(B)から導出されるものであっていかなる社会形態の下であろう必要なのである。資本主義社会の(B)基本関係は日常性としての商品交換関係として形成され，その拡大深化とともに強化されていく。

ヴェーバーはこれについて語ってはいないが次のような印象的言葉でもって「エートス」論を結んでいる。

「将来，この外枠の中（近代的経済組織）に住むものが誰であるのか，そしてこの巨大な発展がおわるときには，まったく新しい予言者たちが現われるのか，或いはかっての思想や理想の力強い復活がおこるのか，それとも—その何れでもないなら——一種異常な尊大さでもって粉飾された機械化的化石化がおこるのか，それはまだ誰にもわからない。」[22)]

「エートス」論の重要性を強く示唆していることにはマルクスの立場からも首肯できる。そして次のようにいうことができる。

「この外枠の中」に住んでいる人々はフランクリンの子孫なのである。彼らが禁欲者であることはフランクリンと同様である。しかも，彼らはフラン

22)（注16）（下）244頁（括弧，引用者）

クリン以上に徹底した合理的な資本の増殖者である。彼らは決して「営利慾」という本能に従って資本の増殖に専心しているのでもない。

彼らは内なる倫理に支えられている。ヴェーバーのいうような機械化された化石人間ではない。彼らは内なる倫理の外装としてプロテスタンティズムを唯一のものとしているのではないだけである。

二，実践の解釈・表現体系

I

マルクスは商品（交換者）所有者が自己の実践を正当化している陳述に対比して，商品交換 W_a（商品A）—G（貨幣）—W_b（商品B）の意味するところを W（商品）に語らせる。

換言すると，商品所有者は全体としての商品交換（流通）を説明するとき，すなわち措定するとき，流通をまず各要素に分解して，それから構成的に自己の立場から「流通」表象をつくりあげる。

彼らにとって「流通」は所与であり，すでに出来上っているのである。常識的に彼らは彼ら自身が経験している商品交換から全体としての商品交換を類推するのである。

マルクスは彼らの説明方法に対して商品語（商品に語らせる）という表現で「流通」の形成（歴史的意味ではない。）を明らかにかる。

商品所有者の相互作用が，実践が日々流通を形成しているのである。とはいっても彼らは流通の形成を意識しているわけではない。彼らは流通にたいして受動的である。

マルクスは「流通」の形成と彼らにとって所存であるところの「流通」（出来上がった流通）の両面から考察している。

これがマルクスの社会科学のはじめの困難を克服する方法である。

既述したように「流通」が最初の考察対象であるのは，(A)と(B)の結合，その相互作用が「流通」によって果されているからである。

(一)，W_a—G—W_bはW_aとW_bの交換である。

$W_a \rightleftarrows W_b$をGが媒介していることについては，直接的交換から生じる不便を取り除くための方策であると彼らは説明している。

W_aの所有者はW_bを欲しているが，W_bの所有者はW_cを欲している場合，Gを媒介にして，W_a—G，G—W_b；W_b—G，G—W_cというようにしてW_a，W_bの所有者はその交換を完結させる。Gについては全ての人が欲するもの，その受取りを拒否しないもの，であると規定することになる。

さて，この説明では交換は相互の欲求の充足という有用性の観点からとらえられており，したがって商品は使用価値的に把握される。それは「外的対象であり，その属性によって人間のなんらかの種類の欲望を充足させる一つのモノである。」

貨幣の諸機能はW—G—Wの運行から導出されている。それらは，(1)計算手段，(2)媒介手段，支払手段，(3)蓄蔵手段としてであるが，マルクスの展開との相違はマルクスの場合，諸機能は「価値尺度」論によって統一されているが，この場合は「価値尺度」機能は計算手段として説明されている。マルクスの価値尺度論は，「流通」措定の方法が担っていた課題に直接，関連している。この点は後の「節」で説明する。

W_a—G—W_bから類推して，W—G—Wに至る彼らの構成的説明は，二段階からなっている。

つまり，W_a（使用価値）$\rightleftarrows$ W_b（使用価値）とW_a（価値）$\rightleftarrows$ W_b（価値）である。

例えば，上衣と亜麻布が交換者相互の欲求充足ということで交換される。ただし，その交換は上衣1着5000円と亜麻布10エレ5000円の等価交換であるというように説明されている。

この構成的説明の原理は人の欲求の充足ということであるから，つまり外

的事物を主体が同化する，同化の動因は人の基本的欲求（主として生理的欲求）という図式であるが，この説明は容易に領域を拡大し得る。

A・スミスを代表例として引用しておこう。

分業の措定については「人間天性の直接的な性癖 (propensity) に由るとしている。

交換者間の関係については次のように。

「私の欲しいものをくれ，そうすれば君が望むものをあげよう。酒屋やパン屋は仁愛 (benevolence) で私達の用を弁ずるのではなくて自愛心 (self-love) からそうするのである。」[23] という。

これら説明の特徴が人間の生理的，肉体的機能面に解消してしまうところにある。

かくて $W—G—W$ には人々を驚かすような不可思議なるものは存在しないのであるが，マルクスはそこに不可思議なるものを認めた。

商品に付されている価格表を彼は社会的象形文字と呼んでいる。マルクスはこれの解読に着手するが，人々は言語活動には言語の何たるかを知る必要がないのと同じように，価格表の何たるかを知らなくても商品交換を行うことができるから，その探求を必要としないのである。

Ⅱ

商品に語らせるというのは構成的説明では商品所有者の相互作用，つまり，実践（流通を形成している）を把握することができないからである。

簡言すると，認識客体である実践（相互作用）は認識主体自身のつくり出したものであるから。

困難には二つの理由があげられる。

「(1)，観察者としての自我が，本来外部から研究しなければならぬ現象に

23)『諸国民の富』Ⅰ・83頁・A・スミス（大内・訳）

関与してしまっているために，自己中心的主体との境界がぼやけてしまいがちであること。

(2)，観察者は観察事象に関与し，自分にとって利害の関心のある事実に一定の価値をあたえてしまうこと。この価値賦与が大きくなればなるほど，認識主体は，客体を直観的に洞察していると信ずることがつよくなり，かつ，それだけ，客観的に客体をつかむための技法の必要を感じなくなること。」[24)]

したがって『資本論』の「商品語」を引用するだけで事足れりとするわけにはいかないのであって「商品語」はいかにして「流通」（商品所有者の相互作用）を措定しているのか，換言すると「商品」はいかにして「流通」を把握したのか，(1)(2)の認識困難をいかに克服しているかということを解釈しなければならない。

個々の商品所有者の諸実践がいうまでもなく考察の対象なのであるが，実践はその表現体を有していることを忘れてはならない。

人は暗闇で明りを求めるように社会関係における自分の実践している位置を確認して不安を解消するために実践に対応した諸カテゴリーで社会を解釈する。

解釈することで彼は自己の実践の正当化・根拠づけをする。

ただし，その解釈が諸実践の総体（関連）を正確に表現しているということは保証されていない。むしろそれが正確な表現であることは全くまれであろう。

なぜなら，彼は諸実践の総体（社会）に自己の立場から離れて関与することは困難であるから，当然，社会の観察も部分に限定されるであろう。したがって彼の解釈も自己中心的傾向をまぬがれないであろう。

そこで一応，諸実践の総体には正当化を求める多くの解釈が存在している

---

24)『人間科学序説』53頁，J・ピアジェ（波多野・訳）「Introduction-The Place of the Sciences of Man in the System of Science」by Jean Piaget

ということができるだろう。

ところで社会を把握するということは社会的実践，（つまり諸実践の総体は社会を支え，維持しているところの実践（社会的実践）を骨組としてもっている。）を表現している㋑解釈体系が存在しており，その解釈体系を見出したということなのである。

商品が語る解釈体系とは実はこれなのである。

問題はこの解釈体系を見出すことである。

(1)′認識客体と認識主体の境界を画定すること(2)′客体に賦与されている価値を相対化することが，社会（＝商品所有者の相互作用）を認識するさいの困難(1)と(2)を克服するための要点である。(1)′は㈺諸解釈を考察の対象とすることによって可能となる。

また，諸解釈が整理・分類できる枠組を発見できるならば，諸解釈は諸個人が自らの実践を正当化する陳述であるから，この枠組は諸実践を整理・分類できるということになり，この枠組は，(2)′を可能として，社会的実践の把握を可能とさせるだろう。

そのために，まず考察対象は〔諸実践の総体・㊐諸解釈〕であることになる。

self-interest を追求している諸個人の諸実践の総体（商品所有者の相互作用）は結果として(A)の四条件を充足し，しかも(B)の再生・維持を確保している。

このことは，諸個人の諸実践の総体が(A) ⇄ (B)の作用を果しているということである。

㋑の解釈体系はこの諸実践の総体を示している。ここでの解釈とは諸実践が表現体系を有しており，この表現体系を解釈するということである。『資本論』の上向の叙述体系はまさに，この表現体系の解釈である。

個々の実践には実践者それぞれの解釈が対応している〔諸実践の総体：諸解釈〕諸解釈を整理分類できる枠組を発見し得たならば，その枠組には社会的実践が対応している。

A・スミスの「神のみえざる手」による調和の説明体系は成功してはいないが㋑に相応させようとしているということができるだろう。

そこで考察対象は〔諸実践の総体：諸解釈・表現体系〕となるであろう。

この考察対象は社会を把握するためのものであったということは，資本主義社会の構造(A)⇄(B)が〔諸実践の総体：諸解釈・表現体系〕のなかに読み取ることができるということである。

私達は〔諸実践の総体：諸解釈〕についての「資料」は得ることができるが，問題は諸解釈を整理・分類できる枠組を獲得すること，それから〔諸実践の総体：表現体系〕をいかに把握するかである。

私はマルクスの方法に依拠している。

マルクスは後者の問題に対する答えを「商品語」の分析で，つまり「1章，商品」の特に「価値形態論」で与えている。

「商品語」の分析には「枠組」が必要である。

Ⅲ

彼ら（商品所有者）は自己の実践の中心課題である「富」についてさまざまな解釈を行っている。

マルクスはこれら，〔諸解釈〕が「合目的的な生産活動（具体的有用労働)」と「同質の社会的労働（一般的抽象的労働)」との二重の形態の労働に還元できることを発見した。

換言すると，これら諸解釈は「富」を使用価値的に把握しているか，価値的に把握しているか，どちらかの系列に分類できるという。具体的労働に対応した範式（枠組)，使用価値範式と抽象的労働に対応した価値範式によって諸解釈は整理・分類できることをマルクスは発見したのである。

この発見がマルクスに理論上コペルニクス的転回をもたらしている。

諸解釈の整理・分類が可能となったことによってマルクスは社会的実践（商品所有者の相互作用）の表現体系が存在していることに気がついた。つ

まり，「商品」とか「貨幣」「資本」とよばれているモノは社会的実践の表現体であることを認識した。

「商品に含まれている労働の二面的性質」とはまさにこれを示している。

「商品」カテゴリーは労働の二面性（抽象的労働と具体的労働）から意味を付与されている。

マルクスはいっている。「商品に含まれている労働の二面的性質は，私がはじめて批判的に証明したのである。この点が跳躍点であってこれをめぐって経済学の理解」[25] がある。ブルジョア経済学の諸カテゴリーはモノの属性から，究極的には意味を得ているのであるが，マルクスにあっては「商品」「貨幣」「資本」は社会的実践から意味を付与されているのである。

ブルジョア経済学の批判的叙述は社会的実践の叙述なのである。

労働の二重性，抽象的労働と具体的有用労働はマルクス自身が語っているようにマルクスの資本主義社会の構造分析には基本的概念である。

「１章，商品」で展開されている抽象的労働と具体的労働を導出（認識）する方法はマルクス自身の論理からみて大いに問題があることをこれまで幾度か指摘した。

「１章」での導出に依拠するとどうしても「価値」は実体的に解釈され，「価値」は関係であるという，もう一方の重要な規定が単なる飾りとなってしまう。

「１章」での極めて形式的な導出方法は読者の理解を容易にさせるという傾向が強く，彼自身の基本概念の認識方法とは異なっている。

彼はいわゆる（「１章，１節」での展開が示している）「蒸留法」で労働の二重性を認識したのではない。

人々の関心の対象である「富（＝商品）」についての先行する諸論述を検討して，これら諸論述を整理・分類する枠組を発見したこと，そしてそれが労働に結びついていることを認めたのである。

---

25)『資本論』Ⅰ・54頁　マルクス（向坂訳・岩波）

労働，つまり実践は表現体系を有している。それは実践者の意識的表現（解釈）体系であり，無意識的表現体系，すなわち社会的実践の表現体系でもある。

したがって実践者（商品所有者）の相互作用，すなわち「流通」の考察は個々の商品所有者が陳述していることと「流通」の表現体系（個々の商品所有者にとっては無意識的表現体系）がその対象となる。

マルクスは「富」について語っている人々の論述を分析して，これらが「合目的的な生産活動」と「同質の社会的労働」に帰することを発見した。この発見は「経済学」の解釈にとって，まさに“コロンブスの卵”であった。陳述は実践の反映（表現）であるという極めて常識的事実は次のような意味をもっている。

「富」という社会の中心的関心事についての人々の陳述（論述）が「二重の形態の労働」に帰するということは社会を動かしている実践（労働）がこれらであるということである。

さらに論述が体系的に整理・分類できたということはこれら実践に応じた「モノの見方」「考え方」が，つまり「範式」が存在しているということである。この二つの意味内容から，諸個人の意識性，実践とその社会を特徴づけている基本的関係の関連という重要課題へのアプローチが可能になってくる。基本関係（商品所有者の相互作用）を形成している主体がいかにして基本関係を認識することができるかという社会科学が最初に直面する困難の克服を可能ならしめる。すなわち基本関係を〔実践：表現体系〕として把握することによってである。『経済学批判』の「A，商品の分析のための史的考察」から『資本論』の「1章2節商品に表わされた労働の二重性」への展開はこれである。

私は「抽象的労働」を価値実践，「具体的有用労働」を使用価値実践と呼ぶことにする。

使用価値実践の対象は外的（物理的）自然であり，具体的で個別的である。

使用価値実践は目的，作業方法，手段及び成果によって規定される。

したがって使用価値実践は「すべての社会形態から独立した人間の存立条件であって人間と自然との間の物質代謝をしたがって人間の生活を媒介するための永久的自然必然性である。」

「およそまだ社会的でない人間にもすでにどのようにか社会的に規定されている人間にも共通なものである。」という超歴史的規定を得る。

使用価値実践に対応した「モノの見方」すなわち使用価値範式は人と人との関係を抜きにした主体の外的自然への同化・調節（主体⇄外的自然）からのものである。

価値実践では「労働（実践）の質，性状，及び内容」は一切関心事ではなく，ただその量が問題となる。

価値実践は対象の価値化，量化をその本性としている。つまり価値実践の対象物は抽象化され，その具体的属性は実践の関心ではない。価値実践はその内容を主体間関係から与えられており実践者の知覚，感覚の多様性，豊かさは一元化されている。価値実践は社会が主体に強制している実践であるということができるし，その社会を形成しているということもできる。注意すべき事は使用価値実践と価値実践は実践の二面性ということである。ある所での実践が使用価値実践であるというのではない。使用価値実践は価値実践によって取込まれ、包摂されている。

すなわち，価値実践は資本主義社会を動かし，支えている実践，換言すると社会的実践として機能している。これに対し使用価値実践は個々人に本来的に備わっている。[26)]

かかる意味において価値実践と使用価値実践は主体に内化され，拮抗している。

26）マルクスは使用価値実践について次のように述べている。「人間は自然素材そのものに対して，一の自然力として相対する。彼は自然素材を，彼自身の生活のために使用し得る形態において獲得するために，彼の身体に属する自然力，腕や脚，頭や手を動かす。この運動により，彼の外にある自然に働きかけ且つこれを変化させるとともに，同時に彼は彼自身の自然を変化させる。彼は彼自身の自然のうちに眠っている潜在能力を発現させ，その諸力の活動を彼自身の統御に服させる。」（注25）231頁

価値実践への志向と使用価値実践への志向を拮抗させている主体間関係は具体的にはまず商品交換の関係である。商品交換の関係，つまり商品所有者の相互作用に貫徹している社会的実践とその表現体系を読みとることが，ここでの課題である。

実践の二重性を表現している商品は次のよう説明される。「商品は使用価値または商品体の形態で，すなわち，鉄，亜麻布，小麦等々として生れて来る。これが彼らの生れたままの自然形態である。だが，これらのものが商品であるのは，ひとえに，それらが二重なるもの，すなわち使用対象であると同時に価値保有者であるからである。・・・・・・

諸商品の価値対象性は・・・・・一体どこを摑まえたらいいか誰にもわからない。商品体の感覚的に手触りの荒い対象性と正反対に，諸商品の価値対象性には一分子の自然素材もはいっていないのである。」[27)]

諸商品の使用対象性は誰にでも知覚できるが，その価値対象性をとらえることは難しい。

そのモノをどう捻りまわしても価値を見出だすことはできない。そのモノの価値対象性は，そのモノに対する人の志向，働きかけ，として把握される。課題への接近は「実践」の解釈にある。

W_a—G—W_bの意味するところを，商品所有者ではなく，商品A，Bに語らせる。

x量の商品Aはy量の商品Bに値する。

つまり，$W_a \cdot x = W_b \cdot y$であるが，これは，$W_a = W_b$を前提として，はじめて成立するのであるから，$W_a = W_b$を考察しなければならない。

A，Bを例えば，亜麻布と上衣とするならば，亜麻布と上衣を等置せしめているものは何であるか。野蛮人または半野蛮人は舌を用いて交換を成立させる。[28)]

亜麻布＝上衣で，亜麻布と上衣はそれぞれに同じことを語っている。

---

27)（注25）62頁

亜麻布は上衣を同化する，というが上衣もまた，亜麻布を同化する，という。亜麻布(A)に語らせてみよう。「W_aはW_bを同化する」[29] とはA商品はB商品を自己の意味体系のうちに取込むことである。

すなわち，A商品の内容がB商品によって表現されるのである。A商品はB商品に意味を付与するのである。そこでA商品の内容とは何かが問題になるだろう。

A商品の内容は自然的，素材的属性か，それともなにか全く別のものか。

W_aの所有者は前述したようにB商品の属性が，例えば上衣であるとしたら上衣の使用価値を享受するためにW_aを提供するのだというであろう。そしてA商品の生産にあたってはその消費において使用価値が十全に発揮されるように意を尽したというだろう。

前述した構成的説明の前半，W_a（使用価値）$\rightleftarrows$ W_b（使用価値）である。これによって彼らにとって所与である商品交換の存在根拠が与えられ，これをもって商品交換（流通）の措定とする。この説明方法は使用価値実践に照応している使用価値範式に立脚している。

彼らは次に，$W_a \rightleftarrows W_b$の交換比率決定の説明に入るのであるが，このとき，A，B，C，D……　の諸商品はその使用価値を捨象され，量に還元されている。価格決定機構の解明は全てのモノが量化されていることが前提である。これは構成的説明の後半，W_a（価値）$\rightleftarrows$ W_b（価値）であるが，前半と後半の見事な分離は対象である商品所有者の諸実践の総体の裁断でもある。後半の説明方法は価値実践に照応した価値範式に立脚している。

---

28)（注25）125頁
私達には交換にさいしての奇妙と思われる行動も西海岸住民達の共同体を規制している原理のあらわれとして，理解されるべきである。
彼らにしてみれば，「モノ」に付している価格表を奇妙と感ずるであろう。

29)「W_aはW_bに値する」と通常翻訳されているが，私は平田氏に従って「W_aはW_bを同化する」という表現を採用する。マルクスの本旨をよくあらわすと思う。「値する」は価値を実体として理解させる危険性が大きい。
「日本の日常語では〈値する〉は同等化するという意味を示さない。」
平田清明・『経済学と歴史認識』，331頁。

商品交換（流通）は，W_a（使用価値）⇄ W_b（使用価値）と W_a（価値）⇄ W_b（価値）の交換比率の決定の二段階構成によって説明されているということは，彼らが解明しようとしている対象の形成の方法をもこれは示している。つまり商品流通 $W-G-W$ をまず裁断し，次にそれらを結合するという方法である。認識上の困難はここには存在しない。

Ⅳ

それでは，A商品はいかなることを語っているだろうか。

〔$W_a \rightarrow W_b$〕だけでなくA商品は〔$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕のように他の多くの商品を同化するとき〔W_b，W_c，W_d，……〕は，それぞれの異なった自然的属性で W_a を表現している。〔W_b，W_c，W_d，……〕はA商品によって意味を与えられている。

換言すると，それぞれの属性を異にしている〔W_b，W_c，W_d，……〕はA商品によって交通可能になっており，A商品によって統括されている。（Aの意味体系）

しかし，A商品が語ることをB，C，D，……商品も同様に語り得る。

A商品の位置をB，C，D，……商品も占めることができるから。

つまり〔$W_b \rightarrow W_a$，$W_b \rightarrow W_c$，$W_b \rightarrow W_d$，……〕〔$W_c \rightarrow W_a$，$W_c \rightarrow W_b$，$W_c \rightarrow W_d$，……〕〔$W_d \rightarrow W_a$，$W_d \rightarrow W_b$，$W_d \rightarrow W_c$，……〕のようにB，C，D商品もそれぞれ他商品を同化する。

これは，要するに全ての商品が同化されていないということを示す。

これではA，B，C，D……の意味体系が存在することになってA，B，C，Dは交通不能である。〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕（Aの意味体系）〔$W_b \rightarrow W_a$，$W_b \rightarrow W_c$，$W_b \rightarrow W_d$，……〕（Bの意味体系）〔$W_c \rightarrow W_a$，$W_c \rightarrow W_b$，$W_c \rightarrow W_d$，……〕（Cの意味体系）〔$W_d \rightarrow W_a$，$W_d \rightarrow W_b$，$W_d \rightarrow W_c$，……〕（Dの意味体系）の状態の下でA，B，C，D……諸商品が交通可能であるためには，諸商品が表現体を共通にして，

しかも意味付与を，意味されるところのものを一つにすることである。

例えば，諸商品がAを共通の表現体としても諸商品がそれぞれ異なった意味をAで表現しているならば，Aを介しても諸商品は交通不能である。したがって〔$W_b \rightarrow W_a$，$W_c \rightarrow W_a$，$W_d \rightarrow W_a$，……〕であるとき，W_b，W_c，W_d，……は同じ意味を W_a に付与しているならば，諸商品は交通可能である。

そして，この場合，Ⅲの価値形態は〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕のⅣ形態に転形して諸商品の意味（価値化）を充全に発揮する。

Ⅳ形態は W_a が接するものは，触れるものは，全て価値化することを示している。

「商品」には実践（＝労働）の二重性が表示されている。換言すると，実践の二重性の表現体が商品である。

使用価値実践を表現している「商品」は，その自然的，素材的属性から語られるのにたいし，価値実践の表現体としての「商品」は質的差違を捨象され，無差別一様な量に還元されている。価値実践は対象の価値化，量化をその本性としている。

諸商品が共通の意味内容を有しているというのは，価値化，量化のことである。

したがって商品Aは商品Bを同化する：「$W_a \rightarrow W_b$」とは商品Aは商品Bを自らの価値実践のうちに取込む，つまりBの価値化である。Bの具体的姿態をAは自らの価値実践の表現体とするということである。

もちろん，商品所有者が実践しているのであって商品ではない。ただ商品所有者が意識していないところを商品に語らせているのである。商品所有者は価値化の実践をしていてもその商品の使用価値性を語るであろう。

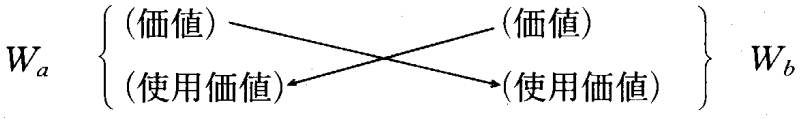
前述したように人々は流通を個別の商品交換，$W_a — G — W_b$ からの類推で構成する。

W_a（使用価値）$\rightleftarrows$ W_b（使用価値）と W_a（価値）$\rightleftarrows$ W_b（価値）に商品交換を分解し，前者で商品交換の存在根拠を，後者で価格（交換比率）

の決定機構の説明に入る。

商品所有者は自らの実践をこの二段階構成に基づいて解釈する。この解釈では実践は使用価値と使用価値，価値と価値が関係し，極めて安定的で，静的である。実践は相互に使用価値に対する欲求を充足させて終結する。

商品が語る彼らの実践は不安定で，動的である。W_a—G—W_bを商品は次のように語る。



商品Aの所有者甲と商品Bの所有者乙とは互に同化の働きかけをする関係にある。甲，乙ともに相手を量的にのみ評価し，ともに相手の個性を否定する。しかも，この量化の関係に制限がない以上，終結しない。簡単な価値形態（$W_a \rightarrow W_b$）が語っていることは対象の価値化という終結のない運動である。したがって簡単な価値形態はⅣ形態〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕として完成する。

商品Aと商品Bの関係が示していることは，価値実践が能動的で使用価値実践は受動的である。そしてこの関係は価値実践によって支えられているということ。

人間にとって本源的実践である使用価値実践は価値実践によって絶えず否定されているのだが，それは本源的であるが故に完全に消しさられることはなく，潜勢化して価値実践の対象の量化を批判する。

Ⅲ形態において商品Aの具体的姿勢で諸商品が表現しているものは価値実践である。

諸商品の価値実践はもちろん商品所有者がしている。それはモノとしてのAへの志向，関係において彼らは商品に命ぜられて価値実践をしている。

再言すると，諸商品が交通するためには人の手を借りなければならない。したがって，諸商品の所有者に諸商品が共通に有している意味内容を知覚させ，そしてその意味内容を彼らに実践させねばならない。

そこで諸商品は共通の意味内容（価値化）を具体的なモノで表現し，その

モノに対する彼らの実践が実はその意味内容の実践となるようにしているのである。ここにⅢ形態からⅣ形態への「転形」の意味が存在する。

私達の眼前にある貨幣形態がまさに諸商品が共通の意味内容を実現するためにつくりあげたものである。貨幣（Ⅳ）形態は出来上った形態であり，人々はその結果を認知するにすぎない。Ⅳ形態，〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕の下では人々はAの具体的属性が，〔W_b，W_c，W_d，……〕を同化していると思込む。Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの形態はⅣ形態の形成を示しているが，人々はその形成を認識しない。[30)]

30）第Ⅲ形態（一般的価値形態）をマルクスは次のように示している。

上衣１着　＝
茶10ポンド　＝　亜麻布20エレ
コーヒー　＝
小麦１クォーター＝

「一般的価値形態は商品世界の共通の仕事としてのみ成立するのである。」

「亜麻布自身の自然形態は，この世界の共通な価値態容であり，したがって亜麻布は他のすべての商品と直接に交換可能である。」

さて，次の事に注意してほしい。もしもこのようであるならば，商品所有者は競って亜麻布を求めるであろう。それは他商品と直接に交換可能な状態にあるからである。それでは何故，交換可能な状態にあるのか。商品所有者はそれが「この世界の共通な価値態容である」からとは返答しないであろう。

商品所有者は亜麻布は人々に好んで受取られるからと答えるだけだろう。

しかしそうであるならば亜麻布の位置は人々に受取りを拒否されないであろう金が占めるべきだろう。

マルクスは「第Ⅲ形態において，商品金を商品亜麻布の代りにおくならば」貨幣形態になるという。

貨幣形態　亜麻布，20エレ　＝
上衣，１着　＝　金　２オンス
茶，10ポンド　＝
コーヒー，40ポンド　＝

「第Ⅰ形態から第Ⅱ形態へ，第Ⅱから第Ⅲ形態への移行にさいしては本質的な変化が生じている。これに反して，第Ⅳ形態はただ亜麻布の代りにいまや金が一般的等価形態をもつに至ったということ以外には，第Ⅲ形態と少しも異るところはない。」

続けてマルクスは次のように述べている。「直接的な一般的な交換可能性の形態，または一般的な等価形態が，いまや社会的習慣によって終局的に商品金の特殊な自然状と合生してしまったといことである。」

一般的等価の役割つまり，貨幣をいかなるモノが演ずるかは社会的習慣に依ると

商品所有者は形態Ⅲが形態Ⅳを生みだしたということを認識することはない。形態ⅣはAという具体物を「金（＝貨幣）」であるとするならば，形態Ⅳは彼らの日常世界である。

B，C，D……諸商品は「金」に還元されてのみ意味，つまり交通可能

いうことは，マルクスにはⅢ形態とⅣ形態とを分ける本質的な事ではないらしい。

しかし，私はⅢ形態とⅣ形態の差異にこそ「価値形態論」の意義があると考えている。

商品所有者には金は生れながらにして，その属性の故に「価値」あるものであって他の諸商品を従える王の地位にある。

Ⅲ形態は商品所有者の日々の実践がかかる役割を金に演じさせているということを認識させる。Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ形態は商品の語るところであり，Ⅳ形態は商品所有者が意識し，陳述するところである。

Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ形態は商品所有者の相互作用，諸実践の総体を貫徹し，それらを規制している枠組を示している。

Ⅰ形態〔$W_a \rightarrow W_b$〕商品Aは商品Bを同化する。商品Aの同化対象の拡大としてⅡ形態が与えられる。〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕

Ⅰ形態，Ⅱ形態では商品Aの位置に他の諸商品もつくことができるということが当然想定される。したがって，Ⅰ，Ⅱ形態ともに「価値形態を与えられるのは個々の商品のいわば私事である。そして個々の商品は他の商品の協力なしに，このことをなすのである。」

Ⅲ形態は「商品世界の共通の仕事としてのみ成立するのである。一商品が一般的価値表現を得るのは，ただ同時に他のすべての商品が，その価値を同一等価で表現するからである。そして新たに現われるあらゆる商品種はこれを真似なければならない。」とマルクスは説明する。

Ⅱ形態からⅢ形態を得るには，マルクスの表現ではⅡ形態を逆にすればよいわけであるが，上記の引用にもあるように事は簡単ではない。マルクスはⅠ・Ⅱ形態は私事でありⅢ形態は諸商品の全面的社会関係であるという。マルクスはⅡ形態とⅢ形態について，Ⅱ形態の表示は理論的，抽象的であってⅢ形態は交換過程そのものの社会的結果となるとも述べている。

Ⅱ形態とⅢ形態の関連について，すなわち「私事」と「社会的なる事」あるいは「理論的，抽象的」と「具体的事実」の関連の究明の不充分性がⅢ形態とⅣ形態との決定的差異の不鮮明，整理の不充分性となっているように思う。

私はⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ形態でマルクスの表示している等式（例えば，亜麻布20エレ＝上衣1着）を矢印で，（亜麻布20エレ→上衣1着）表示した。

これは亜麻布は自らの価値を上衣の身体で表現する，つまり亜麻布は上衣を価値化するというマルクスの論理の核心をよく説明すると思ったからである。

Ⅲ形態とⅣ形態の差異は等号よりも矢印によってより良く表現できる。矢印によってⅢ形態とⅣ形態の間の断絶，認識論上の逆転を示すことができる。

という実践的意義を有するのである。商品所有者は積極的に金への還元を意図している。

彼らにとって諸商品の質的差異は金量の差異である。いわば「アゼンスのタイモン」の世界である。諸商品のなかでの「金」のこのような地位は「金」の生れながらの属性がもたらしたと人々は思っている。

しかし商品は人々の「金」への志向,「金」をめぐっての諸実践は形態Ⅲの実践を母胎としているということを語っている。「金」の地位は人々の意識せざる価値実践の結果であるといっている。

形態Ⅳは人々にとって所与であるが，しかし形態Ⅳは形態Ⅲによって日々形成されている。

形態Ⅲの形態Ⅳへの移行は，かくて認識上の決定的差違を生みだしている。

Ⅲ形態では価値の表現体であるAが，貨幣（Ⅳ）形態では人の意識上で価値それ自体に転換してしまう。

したがって，多くの人々の価値尺度と価格標準の混在はⅢ形態を抜きにしてⅣ形態だけを意識している結果であるということになる。

V

金は，貨幣商品であるとする。

「金の第一の機能は，商品世界に対してその価値表現の材料を供し，または商品価値を同分母をもつ大いさ，すなわち質的に等一で量的に比較の出来る大いさとして表示することにある。こうして，金は価値の一般的尺度として機能し，まずこの機能によってはじめて金という特殊的な等価商品は，貨幣となる。」[31)]

ここで規定されている価値尺度機能は，Ⅲ形態〔$W_b \rightarrow W_a$，$W_c \rightarrow W_a$，$W_d \rightarrow W_a$，……〕においてW_aが果たしている機能である。

貨幣の他の諸機能，(1)計算手段（価格の尺度標準）(2) 媒介手段 (3) 支

31)（注25）123頁

払い手段 (4) 蓄蔵手段 の展開は（Ⅳ）形態，〔$W_a \rightarrow W_b$，$W_a \rightarrow W_c$，$W_a \rightarrow W_d$，……〕を前提するだけで規定することができる。

諸機能展開のためにⅣ形態は，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ形態から導出されているということは必要でないようにみえる。

しかし，既述したようにⅠ，Ⅱ，Ⅲ形態は貨幣概念（Ⅳ形態）の理解には必須であった。そこで必須であるゆえんのものを価値尺度機能にあてはめて解釈してみよう。

具体物Aが共通の意味内容（価値化）の表現体として摘出されたということは，それが①，表現体として適確である，ということであり，またそれが，② 商品所有者の実践を共通の意味内容の実践たらしめるに適確であるからである。

具体物Aの価値尺度機能とはマルクスの説明では①だけのようであるが，②が付加されねばならない。

具体物Aが①，②の機能を適確に果しているかどうかは，意味の内容と実践が行なわれている場の二面から規定される。場は経済的だけでなく文化的，自然的環境を包含している。現実にはAの位置を金が占めたのである。

場が変化すれば別のモノが①，②の機能をより適確に果すために金に替ってその位置を占めるであろう。[32)]

（物的代謝）を遂行している価値循環において金の価値尺度機能はどのように作用しているだろうか。

価値循環は上方への累積と下方への累積を繰返しながら拡大していく。[33)]

上方への累積は蓄積需要にリードされて，価格は上昇し，利潤率の上昇をうながし，これが更なる蓄積需要を刺激していく。

諸資本家相互間における需要の創出は貨幣（商業信用，銀行信用は貨幣（＝金）の制約を受けている。）を介して，つまり貨幣からシグナルを受け

32) 拙稿「マルクスの価値尺度論」　山口経済学雑誌，23巻3・4号
33) (注1)「3章1節」

ながら，おこなわれている。

換言すると，信用の連鎖の拡大，つまり時間，空間を越えての交換のつながりは金によって交換の中味である価値が保存されているということを人々が確信しているから可能となっているのである。

生産停止によって引き起された下方への累積も諸資本家は貨幣（＝金）が生みだしている諸シグナルを受けて生産の調整を図っている。

換言すると，諸資本家の価値化の実践は，貨幣（＝金）に対する関係を通して上方への累積では積極的に，下方では消極的におこなわれている。

上方，下方への振動を一定の幅におさめる（③を充足させることになる）ように警告を発する信号，これが金の価値尺度機能である。

かかる事態から人々は周期的に経済混乱を生みだしている諸資本家の価値化の実践は金それ自体への諸資本家の強い執心にあると考えて，価格標準としての金の機能を廃することで，経済混乱を避け得ると解釈した。

Ⅵ

私は「社会」を(A)，(B)の二つの要素から考察しているが，ここで(A)について重要な論点を述べておかねばならない。

(A)を，私は「生産一般」として，すなわち，すべての時代の生産に共通している特徴から規定している。

しかし，(A)の使用については，この規定がマルクスが指摘しているように「主体である人間と客体である自然」を想定して抽出されたことから生じる誤りを避けなければならない。

つまり「現存の社会諸関係の永遠性と調和」とを証明するために「生産一般」の規定が利用されるのが常であるが，この誤りを避けなければならない。マルクスは結局のところは，この誤りを避けるためにこの規定を使用することを断念していることを想起すれば，なおさらの注意を要するであろう。

(A)の使用について注意すべきことを使用価値実践（「具体的労働」）につ

いて述べておくことにしよう。

具体的労働を超歴史的労働を商品交換関係を基本とした社会（物的依存の社会）における労働とする説明は誤りではないが，だからといって人格的依存の社会を特徴づける労働を具体的労働とするわけにはいかない。なぜなら，具体的労働は人格的依存の社会から抽象されたカテゴリーではないから。労働によって社会の特徴づけができるのは近代社会だけである。

「労働」カテゴリーは，近代的カテゴリーである。「人間の生活を媒介するための永久的自然必然性」であるという「労働」の規定は，人間は自由で平等であるという観念が一般化していなければ導出されない。

自由・平等という諸個人間関係を背景にしてこそ基本的欲求の充足のために外的自然を同化するという観念が，したがって具体的労働の規定が得られる。換言すると，具体的労働，（広義に解するならば，生産一般）を抽出した物質的生産という対象が言語（記号）を介して私達に与えられているのであって，それを超歴史的に使用するときは，この点を念頭におかなければならない。

このことは，社会的実践（労働）の考察は，その表現体系の考察でもあるという私が強調している論点に帰着する。

本稿で(A)の規定を使用しているのは(B)の規定を鮮明にするためである。

資本主義では，(A)と(B)は一体化しているが故に，かえって(B)の規定を(A)の再生産と関連して考察することは，これまでなかった。しかしマルクスの恐慌論は(A)だけでは論ずることはできない。

さて，そこで問題は資本主義社会における具体的労働と抽象的労働の関連である。

私は，上述したように主体における拮抗としてこの関連を解釈したが，そこで次の系論が生じる。

使用価値実践の本源性は資本主義社会では価値実践のかたちをとることによってのみ発現する。したがって資本主義社会の発展は「意味するもの」としての抽象労働（価値実践）と「意味されるもの」としての具体的労働（使

用価値実践）を乖離させる。商品所有者間の関係（実践）は，前述したように㈠主体〔価値・実践 使用価値 ⤫ 価値実践 使用価値〕主体，であるが商品所有者はこの関係を㈡主体・使用価値実践←→主体・使用価値実践として意識し，解釈する。実践は㈠でありながら㈡を表象する。マルクスが亜麻布をして使用価値たる上衣に関係させるものは上衣を使用価値たらしめる或る何等かの有用的質ではないと喝破しているのは亜麻布と上衣はそれぞれの使用価値によって関係しているという人々の常識を背景にしている。事物をその具体的属性において把握するのは人にとって本源的，自然的であるが故にこの常識は強固である。乖離が根拠を有しているゆえんである。ここで乖離というのは㈠と㈡のことである。主体はこの乖離を拡大していく実践にどこまで耐えられるか，この乖離をどこまで容認できるか。

この場合，主体は価値実践者である。なぜならば，もし主体が使用価値実践をしているならば「耐えられるか」「容認できるか」という設問は不適当である。使用価値実践の規定にはかかる乖離を容認しないということが含意されている。

これは，その限界を画定することはできないであろうが，資本主義社会はその再生産の円滑化のために，この乖離を顕在化させないように，プロレタリアートに意識化させないようにするため換言すると実践がもたらす非人間化を単なる偶然事として処理するようにイデオロギー装置を再生産機構に設置することを必須としている。

しかし，強調しておきたいことはイデオロギーの存立基盤は，このように資本家・労働者の階級図式を越えたところにあるということである。

それは主体に内化している拮抗した実践の二重性を根としている。

私は「社会」の考察は〔諸実践（実践の二重性）：諸解釈・表現体系〕を考察することだと既述したが，これから「諸解釈」と「表現体系」の「ずれ」にイデオロギーの存立基盤があるということが導出された。

現実事象の自己の実践的立場の正当化要求を潜在させている解釈はそれ故，現実事象の部分的切り取りであるから，社会的実践の表現体系との「ずれ」

を生ずる。すなわち，群盲象を撫でるの観の如き，それぞれの立場からの社会の解釈は当然のことながら，これら諸視角，諸実践を包括している社会的実践の表現体系とは「ずれ」を生じている。

換言すると諸解釈と表現体系との差異は，前者の諸カテゴリーは具体的事物の属性から意味を付与されているのに対し，後者の諸カテゴリーは「実践の二重性」から意味を付与されているのであって，これは「実践の二重性」が形成している社会関係に諸カテゴリーは位置づけられているということである。

社会関係を支えている，維持している価値実践を意図的に擁護するように解釈体系が構築されるようになるとき，これをイデオロギーと呼んでいる。

解釈によって表象を画定し，その表象界での実践をイデオロギー的実践ということができる。

これらのことはマルクスの論理内のことであるのだが，彼は資本主義経済の発展が必然的にプロレタリアートをしてその廃棄に至らしめると展望することで，これらの解明を深めることをやめている。

「ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述すること」はマルクスにとって資本主義社会の運動の解明であった。

「批判」が単に立場の相違に還元されてしまうのであればその批判は有効ではないだろう。「批判」は批判の対象としている相手の立場を自己の批判体系のうちに包含するものでなければならないし，その立場の存立基盤をも批判体系のうちに位置づけ得るものでなければならない。

換言すると，批判の対象とした諸論述が批判体系のうちにその位置を与えられ，その批判体系によって諸論述の内的関連が説明できなければならない。

批判体系はこれをどのようにして可能とするのだろうか。

諸論述が暗黙に従っている範式に応じている実践の二重性をその体系の最終の解釈項，意味付与項とすることによってである。

人々にとって「商品」や「貨幣」「資本」はモノ，つまり外的対象物である。

ある人にとって「資本」として指示されたモノは別のある人にとっては「商品」であったりする。これは諸個人がそれぞれ自己の立場に中心化させてモノをみるからである。マルクスの批判体系では「商品」「貨幣」「資本」として指示されたモノは実践の二重性の表現体なのである。

実践の二重性によってそれらのモノに意味が付与されている。

self-interest を追求している個々の実践の総体のうちに貫徹している実践の二重性の表現体系はかくて批判体系となり得る。また実践が社会を支えているのであれば，それは社会の運動を表現する体系にもなり得るのである。

Ⅶ

マルクスの摘出した範式で富についての諸論述を整理・分類するとどのようになるか，まず簡単に示しておくことにする。

範式とは使用価値範式と価値範式であり，前者は「現実の労働または合目的な生産活動（具体的有用労働）」（私は使用価値実践と呼んでいる。）に応じ，後者は「同質の社会的労働（一般的抽象的労働）」（私は価値実践と呼んでいる。）に応じている。[34)]

一応私は人にとって有用性の視角から対象を解釈するとき，使用価値範式に立脚しているといい，対象の量化を基礎に解釈しているとき価値範式に立脚しているといっている。

さて，諸論述は「表」のように四通りに分類できる。

実践＼範式	価　値	使用価値
価　値	(一)	(二)
使用価値	(三)	(四)

㈠は価値実践を価値的に解釈する。

㈡は価値実践を使用価値的に解釈する。

㈢は使用価値実践を価値的に解釈する。

㈣は使用価値実践を使用価値的に解釈する。

34) 拙稿，「商品に表わされた労働の二重性」山口経済学雑誌，27巻の1・2号
「資本論における実践，批判，論理の諸相」　34巻1・2号

「解釈する」ということは解釈者にとって意識的事柄であるが解釈の対象であるところの価値実践，あるいは使用価値実践を彼らは把握していない。彼らに与えられているのは言語（諸カテゴリー）である。諸カテゴリーは社会を動かしている，支えている実践を表現しているのであるが，彼らはこのことを認識してはいない。

解釈の対象として解釈者はいかなるカテゴリーを所与の諸カテゴリーから選択しているかは解釈者の実践によって規制されている。しかるに解釈者は自らの実践が価値的志向的か，使用価値的志向なのかということは知らない。

解釈は意識的であるが，解釈の対象であるカテゴリーの選択については解釈者は無意識的である。

㈠は，したがって次のようになるだろう。

価値実践に応じた諸カテゴリーを価値的に解釈する，換言すると価値実践の対象であるモノを価値の意味体系に位置づける。

㈡，㈢，㈣，も同様である。

さて，解釈の対象であるカテゴリーは解釈者が解釈する（意味を与える）まえに，実践の体系によって意味を規定されている。

当の社会には二様の「モノの見方」つまり範式が存在している。

そこで，解釈者が依拠する範式が二つ，諸カテゴリーを規定している実践が二重性，ということで四つの組合せとして，㈠，㈡，㈢，㈣が得られたのである。

実践と範式の一致が二組，その相異が二組である。この組合せに依りマルクスによって「科学的」と評価されたり，「俗流」あるいは「小ブル」と論難された彼らの中味がより一層理解できるだろう。

㈠にはリカード理論を置くことができる。価値実践を表現している諸物は量的差違，量的関連としてのみ示される。諸物の素材的，使用価値的属性を一切捨象することが㈠の特徴である。マルクスはリカード理論への結実を「カテゴリーの素材からの分離」する過程としてこれを古典派経済学と呼び，その科学性を特徴とした。

価値実践の行きつく先がいかなる結果をもたらそうとも，これには一切頓着せず，諸物の量的関連だけを解釈するのが㈠である。マルクスが高く評価したゆえんである。「富」と「価値」のリカードの明解な区別を他の理論のそれと比較すれば，リカードの理論が㈠であることが了解されるであろう。

もちろん，リカード理論に使用価値的解釈が少しもないというのではない。例えば，土地の価格や賃金の決定について使用価値的観点が混在している。しかし，不整合性の論理的克服は価値論の純化として，カテゴリーの素材からの分離の徹底としておこなわれている。これは価値実践を価値的に解釈することによって可能となっている。

またこれによって㈠の解釈は解釈者の主観の排除がなされているという外貌，つまり科学性という外貌を与える。

換言すると，価値実践を価値的に解釈するとは，価値的ターム（価値の表現体）に価値的意味を与えていくということであり，これは解釈体系が対象と分離することである。

すなわち，解釈体系が自立してそれと解釈者の対象とのかかわりからの切断に帰結していく。

リカードは分業や貨幣の発生については説明をしない。彼にとってはこれらは所与なのである。また，富の源泉についても，いかなる労働が生産的であるのか，という議論も彼の体系にとっては無関係であり，利潤率が正であることは当然の事，出発点なのである。

彼は採用したタームの発生，根拠は問わない。これらは彼にとって所与である。

彼はこれを問題にすると解釈体系の整合性が崩れることを承知している。

これを問題にしないことが㈠の科学性の外観を保証している。

㈠を厳密に徹底化しているものとして，シュムペーターの「純粋経済学」を取りあげることができる。

経済学説史の系譜においてリカードとシュムペーターを結びつけるのは全く奇異の感を与えるであろう。

シュムペーター自身が述べているように，リカードは「費用原理」に依って，つまり諸財の基礎となっている財の供給条件から，シュムペーターの場合は「価値原理」に依って，つまり需・給条件から価格の決定を説明する。

前者は労働価値説に，後者は主観価値説の流れに位置づけられている。

このような差違は存在しているが，(一)から生じるところの前述した特性を，リカード理論もシュムペーターの「純粋経済学」もともに備えている。

純粋経済学は個々の経済主体が所有している諸財貨数量の相互依存関係を説明することであるという。[35] いうまでもなく，この関係は交換関係であり，したがって諸財貨に付された価格の分析ということになる。

これを説明する原理は「価値関数」[36] であるが，これは「ある種の経済的事実の一般化に基づく仮定」であって恣意的である。

純粋経済学はこの価値関数から理論を構築するがこれを基礎づける必要は全く存在しない。この基礎づけは心理学や生理学の領域の事である。

シュムペーターにとって交換関係は所与であって基礎づける，あるいは意味づけるということは純粋経済学の領域外のことで他の学科に依らねばならないので純粋経済学の課題とはならないと解釈している。

---

35)「経済的諸量がこういった相互関係にあるという事実は，もしそれらの諸量が一義的に規定されているならば，これを特別に取り扱うべき根拠を与えるものである。諸量の体系の一義的規定性はきわめて重要な科学的事実に外ならない。」

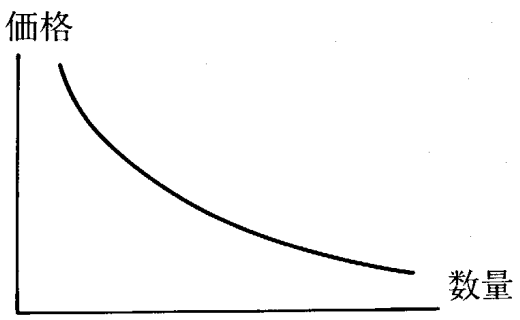
シュムペーター　『理論経済学の本質と内容』（上）88頁（大野・木村・安井・訳）

Joseph Schumpeter 『Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie』

36)「経済主体がある期間内には，横座標によって表わされた各数量に対し，それに応ずる縦座標によって与えられた価格を，それ以上安く買うことができない限り，支払うものと擬制しよう。

こうした曲線によって図示された関数が，われわれの必要とするすべてである。」

「この曲線は，問題となる領域のうちではどこでも横軸に対して負であること。」（注34）147頁



この解釈によって純粋経済学はあらゆる社会に，歴史貫通的に適用領域をもつことになった。けだし，この解釈は交換関係を規定している社会的要因，つまり，価値実践を捨象することによって。[37)]

価値実践によって量化されている対象を量的に解釈するのであるから，それが厳密であればある程，その論理性は保証される。

しかも解釈者の主観からは，その解釈は量の世界であるが故に独立している印象を与える。カテゴリーの素材からの完全な分離が果たされる。シュムペーターは，このように解釈されたものを「分析用具」と呼んでいる。

さて，シュムペーターが交換関係の基礎づけ，意味づけを斥ける理由からみておこう。

「ある経済主体の財貨の所有，およびこれに対する彼のビヘイビアは，無限に複雑な諸関係の所産であり，さまざまな種類の作用と反作用との，見渡しがたい錯綜の所産であって個々の場合にそれぞれに異なっている。

いろいろな経済主体が，まさにこの種類，この数量の財貨を所有するのはなぜか。

また彼がこれに対して，そのように行動し，別なふうに行動しないのはなぜか。われわれの見解によれば，そして通常の見解には反するが，このことは決して経済学の根本問題ではない。右の問に答えるためには，人間精神の創造した知識の全領域，学科の全グループがほとんどすべて動員されねばな

---

37)（孤立した）主体の外的自然の同化，また調節という図式から純粋経済学は構成されている。「交換」は，かかる図式から導出されている。この場合，主体の欲求充足が，基礎命題である。基礎命題とはそれ以上の探求をしないということである。

「一切の経済行為はわれわれにとって，経済的諸量の変動に外ならない……

たとえば，労働をパンと交換する者は，彼の所有する両方の財貨の数量を変更するのであり，同じことが，一匹の猟獣をたおす孤立した経済人によって行われる。彼はたとえば弾丸または労働力のストックを減らし，食料のストックを増加させるからである。」

「交換関係の記述にあたり，孤立経済に適用されない仮定は何ひとつ用いられない。」

純粋経済学があらゆる社会形態に適用可能なのは，上述の図式から構成されているからである。（注34）122頁，218頁

らないであろう。またたとえ全知識を動員したところで，非常に単純に思われるけれども極めて法外な右の問に，満足な答えを与えることができるかどうかは，たぶん疑わしい。[38]」

シュムペーターのこの説明は一見もっともなように思えるが，しかしこの説明にあるように，完全な答えを求めることの困難性によって純粋経済学の課題が超歴史的適用領域を有しているという誤った主張をするようになることは避けるべきであろう。

交換者のビヘイビアについてはちょうどシュムペーターが「価値関数」という仮説を採用したように「実践の二重性」という仮説[39]によって，「人間精神の創造した知識の全領域」を動員しなくても，その基本的形象を得ることはできる。

しかし，「実践の二重性」は価格分析のための仮説ではない。「実践の二重性」の意義は次の事にある。

㈠の諸論述は精細化されてくると，シュムペーターの主張にあるように「科学」の名において対象を細分化する。

「社会学」，「歴史学」，「政治学」，「経済学」，・・・・等々と，そして「経済学」がまた細分化されていく。対象は細分化された学科の数だけ，細分化される。㈠は学科を細分化させるが，それらを統合して，対象の総体を把握しようということはしない。

「実践の二重性」の意義は対象の総体的把握を志向する点にある。

さて，次に㈡をみてみよう。㈡，の領域にはマルサスの諸論述を位置づけることができる。

価値表現体（カテゴリー）を使用価値的に解釈している代表例として資本主義経済（価値実践によって支えられている）が生みだしている失業，貧困

---

38)（注34）242頁

39) もちろん，マルクスの体系では「労働の二重性」は仮説ではなく，実体的である。これを「仮説」とすると，ブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判的叙述であるとともに資本主義社会の運動の解明でもあるという『資本論』の二重の課題は果たされない。

を人間の肉体的，生理的要因によって説明している『人口論』が提示されるだろう。[40)]

マルサスの経済理論はリカードのそれが母胎である。リカードが与えた枠組のなかで，リカード理論の弱点を突くことによってそれは存在している。

例えば，価値論の批判にしてもリカードの費用原理（労働価値説）に基づいた価格論に対置し得る価格論は彼には存在していない。

また，一般的過剰生産を否定した論者にたいして「怠惰，または安易の愛好というような，きわめて一般的かつ重要な人間性の原理の影響を考慮に入れていない[41)]ことを根本的誤りであるというのである。

マルサスは安易に人間性に経済システム（価値循環）から生じてくる問題，（例えば過剰生産）を帰せしめる。

したがって，問題の解決も経済システムではなく人間性に求められる。

私はマルサスのような諸論述の特徴を，（資本主義社会を支えている）価値実践を使用価値的に解釈しているところにあるとする。

マルサス自身の表象では資本主義社会は，地主・教会層，資本家，労働者のそれぞれおかれた状況下でのそれぞれ異った実践つまり使用価値実践によって支えられているのである。

リカードの理論では地主も資本家も労働者もそれぞれ量に還元され，彼らの差違は量の違いだけであるのと対象的である。

マルサスの体系では地主，教会層，資本家，労働者は現実の諸矛盾を解消するように位置づけられている。彼らは社会にたいしてそれぞれ持場を与えられている。換言すると，諸矛盾が生じているのはマルサスのいうところを

---

40) 社会に存在する貧乏は社会制度に，その原因があるのではない。社会制度を改めても人間の性向を変えなければ，貧困を除くことは，できないであろうとマルサスはいう。

(1)食物は人類の生存に必要であるということ。

(2)両性間の情慾は必要であって，大体いまのまま変りがあるまいということ。

この(1)(2)の前提から，マルサスは貧困，それに由来する悪徳を説明していく。

41) 『経済学原理』（下）169頁　マルサス（小林・訳）『Principles of Political Economy』by T. R. Malthus

理解し，実践していない人々の無知に依るということである。

このようなマルサスの社会解釈は価値実践を隠蔽するものであり，私はこれを弁護論的イデオロギーと呼ぶことにする。

リカードの土俵で議論するマルサスにとって価値カテゴリーは所与である。価値カテゴリーを使用価値的に解釈するのであるから，リカードが直面した論理的問題はマルサスあっては人間性に還元されて解決される。

㈡とは逆のかたちで㈢が存在している。㈢に位置づけられる諸論述は，使用価値カテゴリーに価値的意味を付与して解釈している。私はシスモンディやプルードンの諸論述のうちにこれを読み取ることができる。

彼らが極めて実践的解答を提示するのは，社会的実践としての価値実践に対抗した使用価値カテゴリーを（無意識的に）選択しているからである。

シスモンディは「交換を通じての，社会における富の形成」に「孤立人にとっての富の形成」を対置する。つまり後者の観点が資本主義的生産の価値的解釈に重ねられる。

シスモンディは商品生産の増大，拡大が失業，破産を生じさせ，貧富の差を顕著ならしめているということをマルサスとは異なり，価値的解釈をとっているが故に適確に把握していた。

使用価値カテゴリーと価値解釈の乖離は，㈠におけるように価値カテゴリーの価値的解釈であるならば，解釈上の問題は論理の追及によって解答を見出すのであるが，この場合，事態は人間の転倒，非人間化と解釈され，その解消として社会的価値実践の使用価値実践への転換が提示される。[42)]

(i)，資本は労働手段である。

(ii)，労働手段は資本である。

---

42)「彼（シスモンディ）はブルジョア的生産の諸矛盾を的確に批評しているが，しかし，それを理解していない。したがってまた，その解釈の過程も理解していない。だが彼の場合根底にあるものは，実際には，資本主義社会の胎内で発展した生産諸力，すなわち富をつくりだす物質的で社会的な諸条件に，この富の取得の新しい形態が対応しなければならない，という予感であり，また，ブルジョア的形態はただ過渡的な矛盾にみちたものにすぎないのであって，そのなかで富はつねにただ対立

(i), (ii)ともに，資本＝労働手段　（労働手段＝資本）と解釈するならば，(i), (ii)は同じ内容を表現していることになるであろうが，(i)が展開する解釈体系と(ii)のそれは相異している。

(i)は㈡に位置づけられる陳述であり，(ii)は㈢に位置づけられる。

いうまでもなく，「資本」は価値カテゴリーであり，「労働手段」は使用価値カテゴリーである。(i), (ii)の相異は主体（解釈者）の意向が述定の部分に表現されていることから読み取られ得る。

「資本」と「労働手段」の等置は(i)の場合，等置せしめているものは「労働手段」の規定から生じているのに対し，(ii)の場合は「資本」の規定から生じている。

主語としての「資本」,「労働手段」は価値実践に応ずる価値体系と使用価値実践に応ずる使用価値体系によって位置づけられているのだが，このことについては解釈者は意識していない。

意識していないからこそ，彼らは論理を解釈の第一義としながらも，その体系とは異なった範式に依拠することになってしまう。

彼らがいかなる体系に位置づけられ，いかなる範式を選択するかは彼らを育成した環境に影響されているだろう。

マルクスは国民性の相違をも示すだろうとしてイギリスの経済学とフランスの経済学の性格の相違に言及している。私はイギリスの経済学は㈠, ㈡によって，フランスの経済学は㈢によってその特徴を示していると思う。

㈢に位置づけられている諸論述が極めて実践的，政策的であるのは社会を動かしている価値実践に対抗する体系によって社会を表象しているからである。私はこの諸論述を批判的イデオロギーと呼ぶことにする。

的な存在だけを保持し，同時にどこでもその反対物として現われるという予感である。富はつねに貧困を前提とし，貧困を発展させることによってのみ発展するものである。」マルクス『マル・エン全集』26Ⅲ63頁（剰余価値学説史）マルクスはフランス経済学とイギリス経済学の差異はその国民性の差異を示していると述べているが，これは㈠と㈢からまず説明されるであろう。㈢に位置づけられる諸論述の対象は「人間に関すること」に還元されるのが特色である。

㈡の諸論述が体系の擁護，したがって価値実践を隠蔽する役割を果たすのにたいし，㈢の諸論述は価値体系を使用価値体系で置換しようとする。すなわち，㈡の場合の解釈は（価値体系）で表象された社会への適合であるのにたいし，㈢の場合の解釈は（使用価値体系で）表象された社会からの乖離である。

㈣に位置づけられる諸論述はいわゆる「経済学」に分類することはできない。

使用価値カテゴリーの使用価値範式に依る解釈は論理のおもむくところは，生態系に位置づけられたところの，まさに字義どうりの物質代謝となるであろう。

したがって社会の再生産を課題とするような「経済学」は「生態学」に解消されるであろう。

㈣では論理の追求が使用価値カテゴリーが位置づけられている体系を深めるように解釈を推進するからである。

「経済学」が自然を取り扱うのは，それが貨幣によって評価されること（自然の量化）が前提であるが，㈣においては，自然はそれ自体として，自然を構成している諸要素相互の属性（生態系）が解釈される。㈣，の枠組からすると，$G—W—G'$ の中味，ΔG は全くその相貌を異にしてくる。諸個人とっては感覚的に把握し得ても，社会的観点からすると，増殖している価値とは一体，何であるのだろうか。銀行券でないことは明らかだろう。

私は，あらためて経済学形成期の関心事にかえることになる。つまり，「富」とは何ぞやである。F・ソディが「虚像上の富」[43] 概念で分析していることは㈣の枠組からのすなわち，熱力学第一および第二法則を経済学の出発点に据えての正統派経済学の批判である。

価値の増殖は自然にとっての負債である。

以上，みてきたように社会の中心的関心事である「富」についての諸論述

---

43)「フレドリック・ソディの経済思想」ハーマン・E・ディリー（桂木・訳）
「The economic thought of Fredrick Soddy」 by Herman E. Daly

が四通りに分類できるということは，社会に対する見方，考え方に二つの範式が存在しているということであり，これは既述しているように社会認識にとって極めて重要な論点を提示していた。

マルクスに従って、すなわち『経済学批判』の「A，商品の分析に関する学説史」から『資本論』の「商品に表示された労働の二重性」へ転回する論理を解釈して，私は社会認識の方法を説明した。